

原始絵画から読み解く古代エジプト文化

—ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルとメトロポリタン美術館ナイフハンドル—

大城道則

はじめに

古代エジプトの先王朝時代に特徴的な考古遺物として、河馬の牙や象牙で作られた一連のナイフハンドルが知られている。本論はそれら数あるナイフハンドルの中からジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル Gebel el-Arak Knife Handle とメトロポリタン美術館ナイフハンドル Metropolitan Museum Knife Handle とを採り上げる。それら二つに描かれた図像から、我々は最初の統一王朝出現へと文化的成長を続けていた当時のエジプトの様子や社会状況、そして彼ら古代エジプト人たちの持つ王権観等を推測することが出来るのである。以下、二つのナイフハンドルの図像に注目し、他の文化要素などとの比較検討を行いつつ、個々の図像の持つ意味について考えてみたい。

1. ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルの中の異邦人

メソポタミアからの文化的影響

現在、ルーヴル美術館に所蔵されているこのジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルは、19世紀末にフランス人考古学者 G. A. ベネディト Bénédite が中部エジプトのジェベル・エル＝アラクという場所で入手したものであった。ジェベル・エル＝アラクは、ナイル河谷と紅海とを直接結ぶ古くからの交易路ワディー・ハンママート上にあり、また先王朝時代という早い段階から都市として発展していたナカダやコプトスに近い場所にあることから地理的にも重要である。問題は単にその場所で購入しただけのため、正確には出所が不明ということにある。しかしこの考古学的・歴史学的に致命的とも言える「出土地が不明である」という事実にも関わらず、このナイフハンドルはその表面上に描かれた余りに興味深く美しいレリーフから我々に良く知られている資料なのである。そのレリーフはフリント製ナイフハンドル（柄の部分）、つまり使用者が掌で握る所に彫られていた。ハンドル部の材質は河馬の牙である。伝上エジプトということになってはいるが、先述したように個人売買されたものであるため出土地のみならず、正確な出土状況、共伴物の有無も全くわからないが、エジプトで出土した他の同種のフリント製のナイフとの比較によって紀元前 3200 年頃のナカダ III 期に年代付けられている。まさに古代エジプトに最初の統一王朝が出現する直前ということになる。ナイフの刃部

分を含めた形体も古代エジプト特有のものと言えるが、何よりもジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルの表面上に詳細で複雑に彫り込まれたレリーフは、古代エジプト美術史上類を見ない特異なものであった。そこには非エジプト的要素が多分に盛り込まれていたのである（図1参照）。

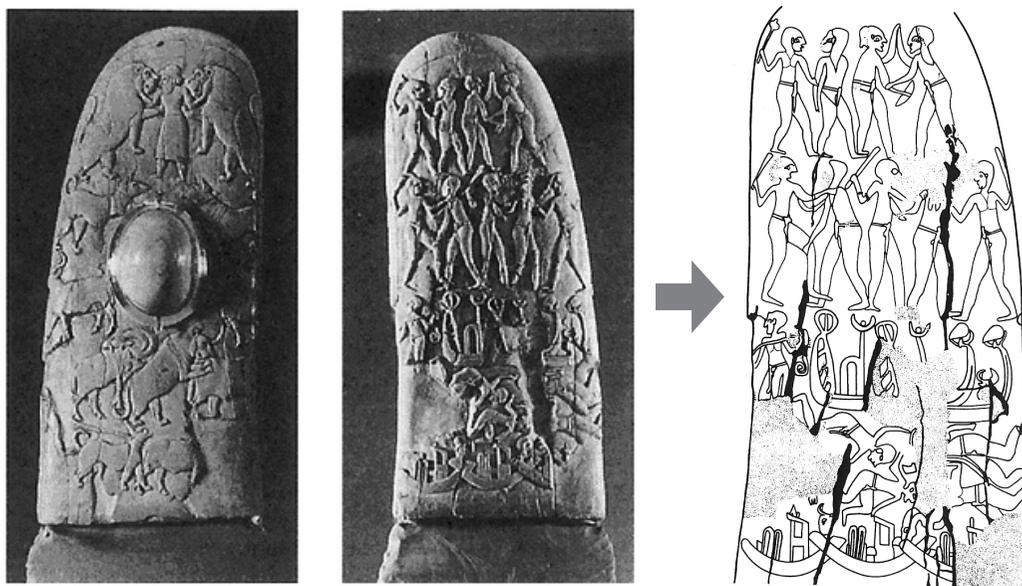


図1 ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル

このような複雑で見た者を惑わせる非エジプト的要素を用いた描き方の解釈として、エジプトに居住していた外国人、例えばシュメールやエラムからやって来た東方の工芸職人たちの存在を想定する研究者もいる¹。その根拠として、しばしばこのジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルの表面（握った時にストッパーの役目を果たす楕円形の突起物がある側の面を表面と表記する）に描かれた場面の解釈が挙げられている。この表面には、エジプト的というよりもむしろメソポタミア的な浮き彫りが施されていた。表面上部には、ヒエラコンポリスの第100号墓の彩色壁画²に見られるものと同じようなメソポタミア起源とされている二頭のライオンを両手で制する英雄の様子が描かれているのである。注目すべきは彼の外見とその服装である。縁取りのある丸い帽子、豊かな顎鬚、そして腰紐で絞められた裾長のワンピースなどは明らかにメソポタミアの印章などにしばしば描かれる人物像と同種のものである。例えばイラクのウルク近郊で出土した大理石製の印章に描かれた人物は、ライオンの代わりに両手で二つの植物を掴まえているが、その少し離れた両脇にはそれぞれ鹿系の動物がジェベル・エル＝アラクのナ

¹ S. Mark, *From Egypt to Mesopotamia: A Study of Predynastic Trade Routes* (London, 1997), p.76.

² 拙稿「原始絵画から読み解く古代エジプト文化—ヒエラコンポリス第100号墓の彩色壁画を解析する—」『関西大学西洋史論叢』第11号（2008）、17-33頁。

イフハンドル同様にほぼ左右対称に描かれている（図2参照）³。



図2 ウルク近郊で出土した大理石製の印章に描かれた人物

これら二つはほぼ同じ構図であると言っても良いであろう。同じ服装の人物が船の上で描かれた例もまた知られていることから（図3参照）⁴、明らかにナイフハンドル上のこの人物はメソポタミアからの文化的影響の下、描かれたものであると断定出来る。そしてこの人物のメソポタミア風の衣装と外見が原因でジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルは、統一王朝出現直前の時期にメソポタミアからエジプトへの直接的影響があった証拠としてしばしば取り挙げられてきた。ただしこの二頭のライオンを制する人物のモチーフ自体は、メソポタミアだけのものではない点に注意しなければならないであろう。起源はシュメールにあるのかもしれないが、実は古代オリエント世界全般において広く知られている構図でもあったのである⁵。

女神とライオン

古代オリエント世界で良く知られたこのモチーフの中心人物は、地域によって男性である場合と女性である場合とがある。初期王朝時代以前から円筒印章やステアタイト製容器などの構図として知られていたメソポタミアでは、男神や怪物が二頭のライオンを制していることが多いが⁶、同じように対のライオンのモチーフをしばしば目にするアナトリアやその周辺地域では状況が異なる。鉄を用い強力な王国を打ち建てたヒッタ

³ Mark, *op.cit.*, p.77-c; ドミニク・コロソ著、久我行子訳『円筒印章：古代西アジアの生活と文明』東京美術、1996年、18頁-6。

⁴ G. Herrmann, *Lapis Lazuli: The Early Phases of Its Trade, Iraq* 30 (1968), fig.5a.

⁵ 例えばミタンニの例も知られている。渡辺和子「メソポタミアの太陽神とその図像」、松村一男、渡辺和子編『太陽神の研究（下巻）』、リトン、2003年、49頁の図26。

⁶ H. Frankfort, *The Art and Architecture of the Ancient Orient* (London, 1970), p.30-fig.19, p.34-fig.25c, p.75-fig.78, p.76-fig.79, p.78-fig.82b, p.197-fig.224. インシ・ラルサ期に年代付けられている二頭のライオンの背に乗るリス女神のレリーフが例外として知られている。Ibid., p.111-fig.119.



図3 メソポタミアの川仕様

トの都であったハットゥシヤのライオン門やネオ・ヒッタイトの遺跡と考えられているシリアのアイン・ダーラ遺跡 'Ain Dara のライオン像 (図4 参照) を思い浮かべずとも、アナトリアでは建築様式などにライオンがモチーフとしてしばしば用いられてきた⁷。ヒッタイト以前のアナトリアにおいて紀元前 6000 年頃のチャタル・フユックで崇拝されていた女神像にも二頭のライオンを両脇に従え出産している場面を表したものが知られている⁸。その上、ヒッタイトの時代に入ると、アリンナの太陽女神が神々のパネオンの最高位に据えられ、レリーフ上で彼女はライオンの背に乗って表されるのである (図5 参照)。



図4 アイン・ダーラ遺跡のライオン像

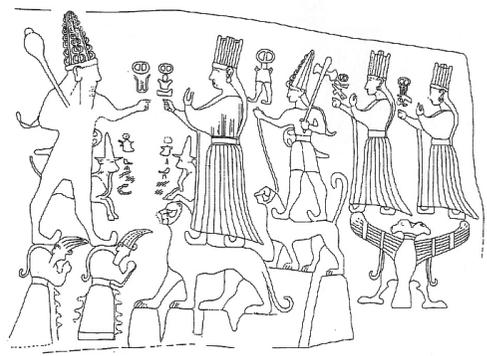


図5 アリンナの太陽女神とヒッタイトの神々

またフリュギアの女神であるキュベレもしばしばライオンを両脇に従え描かれる。ギリシアの大地の女神レアの足元にもしばしばライオンが鎮座している。西方のクレタ島

⁷ シリアのアレッポ城の入口にもライオンの像が置かれている。聖なる場と俗界を隔てる同じような習慣が地域と時間を超えて残存したのかもしれない。

⁸ C. Renfrew, *Virtual Archaeology: Great Discoveries Brought to Life Through Virtual Reality* (London, 1996), p.72.

のクノッソスで発見されている印章にも恐らくレアを表したと考えられる二頭のライオンを従えて山上に立つ女神が描かれている⁹。またエジプトでしばしば図像として用いられるカデシュと呼ばれる女神もまたライオンの背に乗って描かれるのである¹⁰。しかしながら、カデシュは本来セム系の神であり、ウガリトやパレスティナ地域からも多くの類例が知られていることから、アナトリアに隣接する東地中海地域に起源を持つ外来の女神がエジプトにやって来た一例として捉えても良いであろう。紀元前 7000 年頃から栄えていたチャタル・フユック、あるいはそれ以前から存在していた女神崇拝を伝統的に持つ東地中海世界の特徴がメソポタミアとの違いを生み出したのかもしれない。

続いてその下の場面に目を転じてみたい。楕円形の突起物の両側には向かい合う二匹の犬、その下には並んで歩く山羊かガゼル、さらにその下には、獲物を襲う雌ライオンとガゼル、そして最下部には犬が描かれている。数種類の動物が水平に四段に分けられて描かれている。この中で最も注目すべきは犬である。三匹の犬のうち二匹の犬には明確に首輪が付けられている。そして下部の犬には首輪とそれに繋がる縄まで付いている。古代エジプトでは王朝成立以前に犬が狩猟に用いられただけではなく、恐らくペット化していた。後の時代になると犬は皮製の首輪に「勇気あるもの」や「頼れるもの」などの名前が記された¹¹。山犬あるいはジャッカルであると想定されている古代エジプトのアヌビス神は、赤色の布を首に巻いて表現されることが多い。このように犬は現代と変わらず古代エジプトで大事に扱われていたが、その最古の例がこのジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルの表面の図柄に見られるのである。死者を来世へと導き、その墓を護ると考えられていたアヌビス神同様、犬は古代エジプト人の生活の中で大切な存在であった。このナイフハンドルの表面に描かれたモチーフ群は、動物をその具体例とする自然を超越＝制御する人間の存在、つまり王の出現を意味しているのかもしれない。

二つの戦闘場面

一方、戦闘の場面を表したものであると考えられているこのナイフハンドルの裏面は、おおよそ水平に五段、あるいは大きく上下二つの場面に分割可能である（図 1 参照）。上の二つの段はスキンヘッド（坊主頭）の人々と長髪（あるいはお下げ髪）の人々が争っている場面であるように見える。一段目の右側の場面では、円盤型棍棒を掲げた人物が左手で後ろを振り返っている相手の右腕を掴み、今まさに背後から打ちつけようとしている。その左に描かれた二人は両手で取っ組み合いをしている。右側の人物はその右

⁹ 大林太良、吉田敦彦『世界の神話をどう読むか』青土社、1998年、112頁。

¹⁰ G. Roeder, *Ägypter und Hethiter* (Leipzig, 1919), p.63-abb.26; I. Cornelius, The Lion in the Art of the Ancient Near East: A Study of Selected Motifs, *Journal of Northwest Semitic Languages* 15 (1989), p.83-fig.12; id, *The Many Faces of the Goddess: The Iconography of the Syro-Palestinian Goddesses Anat, Astarte, Qedeshet, and Asherah c.1500-1000 BCE* (Göttingen, 2004), pp.45-52.

¹¹ I. Shaw and P. Nicholson, *British Museum Dictionary of Ancient Egypt* (London, 1995), p.87.

手に先の尖ったナイフのような武器を持っているが、もう一方の人物は素手である。二段目には五人の人物が描かれている。右側の二人は手足を掴ませ合いながら、右側の人物が右手に長棒、あるいは棍棒を掲げ、左手で相手の長い髪の毛を掴んでいる。左側の人物は右手で相手の肩口を掴み、左手で相手の左膝をナイフで攻撃しているように見える。彼らの左に描かれた三人は、真ん中の人物を左右の人物が長棒で打ち据えようとしている。真ん中の人物は右手にナイフのようなものを握っている¹²。

彼ら九人の髪型の違いを考慮するならば、スキンヘッド側の五人が有利に戦いを展開していることがわかる。主に武器を所持しているのもスキンヘッドの人々である。スキンヘッド側の人々の武器は、強力な四本の棍棒（あるいは長棒）と一本のナイフであるが、長髪の側の人々はナイフを持つ二人を除きあとは素手で戦っていることから前者の優位性は明らかである。恐らく武器の量、あるいは性能の違いが最終的に勝敗を分けたのであろう。しかしながら、両者とも同型のペニスケースを身につけていることから、本来は同種族、あるいは文化を共有していた人々同士の戦いを表しているのかもしれない。

下の方の三行に区切られた場面は、形体の異なる二種類の船とその間に逃げ惑う、あるいは溺れている人々が描かれている。後の第2王朝期のカーセテム王の石像の台座に描かれたグラフィット¹³の構図と類似するものである(図6参照)。このグラフィットは、カーセテム王が下エジプトにおいて47,209人の敵を倒したことを記念した碑文と共に描かれており、彼の治世にエジプトにおいて王権を巡る二つの勢力による大規模な戦いが起こったことを示唆している。ジェベル・エル=アラクのナイフハンドルもこれと類似した出来事を表現したのかもしれない。



図6 カーセテム王の石像の台座に描かれたグラフィット

¹² B. Adams and K. M. Cialowicz, *Protodynastic Egypt* (Buckinghamshire, 1997), p.55-fig.38.

¹³ C. Aldred, *Old Kingdom Art in Egypt* (London, 1968), pl.4; W. S. Smith, *The Art and Architecture of Ancient Egypt* (London, 1981), p.51-pl.35. 図6はカイロ考古学博物館所蔵であるが、ほぼ同型の石像がオックスフォードに所蔵されている。

上段の船は、船首と船尾が立ち上がったメソポタミアの船に外観が類似していると考えられることが多く（図3参照）、下段の船はブーメラン型をした典型的なナイル川仕様の船であることがわかる。これら種類の異なる二つの船の間には、牡牛の頭部や蛇の頭部と思われるものと少なくとも五人の人物が確認出来る。古代エジプトにおいて牡牛と蛇は、王権に直接結びつく神聖なる動物であった。例えば良く知られた例として、牡牛である聖牛アピスの例が挙げられる。聖牛アピスは古代エジプトにおいて稲妻によって母である牛の胎内に宿ると考えられていた神聖な牛であった。額には白い菱形の斑点を持ち、背中にはハゲワシの紋様が浮かび、それ以外の全身が黒毛で覆われている牛である。また舌裏にスカラベの印があり、尾は二又に分かれており、聖牛アピスの彫像等を作製する場合には、しばしば二つの角の間に太陽を戴く様子で表現された。このような条件を全て備えた牡牛が国中から探し出され、王が即位すると同時に王の分身の聖牛となるのである。聖牛アピスは王と同様に訪問者と接見する「臨御の窓」を持ち、亡くなるとセラペウムという呼び名で知られている地下の集団墓地へと運び込まれる。そしてエジプト王と同様に石棺に納められ、死後は王と同様に冥界の支配者オシリス神となるのである。また古代エジプト王は伝統的に「力強い牡牛」という称号を持つ。力強く生殖力に溢れた牡牛は、豊穰のイメージを備えているため、古代エジプト王の力を象徴するものであった。もう一つの蛇もまた王権と結びつく生き物である。蛇神ウアジェトは下エジプトの守護神であったし、聖蛇ウラエウスは、王冠の前面に取り付けられ王を守護した。蛇はその毒から人々に恐れられることもあったが、同時に邪悪なものから身を護ってくれる存在でもあったのである。

卵型の物体と牡牛の首

最下部の船は、ヒエラコンポリス第100号墓の壁画上に見られる白色のブーメラン型のもの、あるいはナカダⅡ期の彩紋土器に描かれた船と同型のものであろう。またその上部に描かれている方の二艘の船は、上述したようにその形状から外国のものと想定されている。ただしヒエラコンポリス第100号墓の壁画上に見られた非エジプト的なものと考えられている黒色の船とは形状が異なっている。ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルの方は、船尾だけでなく、船首もほぼ垂直に立ち上がっているのである。その上、右側に位置する船首にはマストあるいは船を安定させるためのポールと見なされている物体が描かれている¹⁴。しかしながら、その船首の構造物に関しては、マストであれポールであれ、現時点においてはいずれの解釈も説得力に欠けるものがある。むしろ船の構造上必要であった横梁を描いた可能性がある。イングランド東部サフォーク州ウッドブリッジ近郊のサットン・フー第1号墓で発見された7世紀頃に年代付けら

14 Mark, *op.cit.*, pp.69-73.

れている船葬墓に使用されていた船の横梁¹⁵と同様の構造を持つようなものであったのかもしれない。あるいは宮崎県西都原古墳を代表として日本各地で出土例が知られている船形埴輪の船首と船尾の構造に見られるように、船の左右両側面がそのまま立ち上がり、左右を横木で繋ぐという構造の船を二次元の画面に半捻り画法を用いて表現したもののなのかもしれない。

もう一つの特徴は、ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル上に描かれた船尾の上に卵形の謎の物体が置かれていることである（図1と3参照）。この物体とメソポタミアで使用されていた河川仕様の船の船尾に描かれたものとする種々の町のシンボルとして同一視し、この場面がエジプト人とメソポタミアのシュメール人との戦いを表したものだとする研究者もいる¹⁶。つまり表面に描かれた二頭のライオンを制する男性の服装がシュメールの特徴を持つことと相俟って、このジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルは、しばしばエジプトとメソポタミアという当時の二大文明地域による大規模な戦争場面を描いたのだと考えられることがあるのである。その一方でデルタ西部に位置するレトポリスを表すヒエログリフとの類似性が指摘されることもあることから¹⁷、この卵型の物体をメソポタミアの特徴と断定することは出来ない。また船上の船首の下には角を持つ牡牛の頭部のようなもの、そして同じく船上にポールを持つ先端が旗のような三日月形の意味不明のシンボルが見られるなど、船全体が非常に複雑に装飾されている。三日月形のものは、下ヌビアのワディ・エル＝アラブの岩絵に類似例が見られる¹⁸。

このように混沌とした状況の中からそれぞれのモチーフが持つ意味を捉えるのは困難であるが、後の時代にエジプトで王の化身となる牡牛の角¹⁹のみが上部に描かれた船の上に置かれ、その上、溺れている人々に間切れて牡牛の首だけが描かれていることから、敗者側のシンボルあるいはトーテムが牡牛であった可能性がある。船の上に牡牛を描くという構図の類型が上エジプトのヒエラコンポリス HK61 の岩絵（図7参照）²⁰から知られている点にも注意が必要であろう²¹。また下部に描かれたブーメラン型の船よりも上部の船の方が装飾性が高く幾分手の込んだ描き方がなされている点が気に掛かる。普通の我々の感覚で言えば、尊重すべきものは上に、そして忌むべきものは下に配置するものであり、さらに上位にあるものを詳細に美しく描くものであるということから考え

¹⁵ A. C. Evans, *The Sutton Hoo Ship Burial* (London, 1986), pp.23-28.

¹⁶ Mark, *op.cit.*, pp.69-70.

¹⁷ *Ibid.*, p.74.

¹⁸ J. H. Dunbar, *The Rock-Pictures of Lower Nubia* (Cairo, 1941), pl.XI-fig.47.

¹⁹ オールを置くための設備の可能性もある。

²⁰ M. A. Berger, *Predynastic Animal-headed Boats from Hierakonpolis and Southern Egypt*, in R. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus: Studies Dedicated to Michael Allen Hoffman* (Oxford, 1992), p.108-fig.1.

²¹ 図7の例では牡牛の全身が描かれているため、ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル上のようにマイナスの意味で捉える必要はない。

ると、戦闘において不利な状況にあったのは、牡牛をシンボルとするエジプト側、あるいは地域を限定するならば、上エジプト側と考えられるかもしれない。

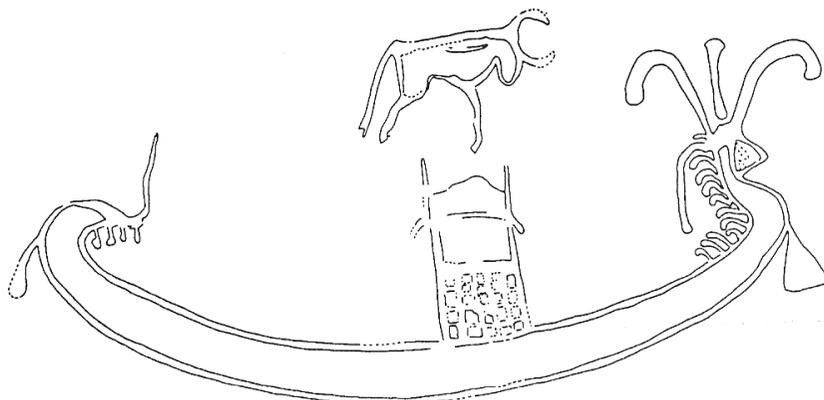


図7 ヒエラコンポリスのHK61の岩絵

また船の形状の違いから判断すれば、地域的にも民族的にも全く異なる二つの集団同士による戦闘場面と解釈出来そうであるが、人々が身に着けているペニスケースや髪型を除く肉体表現の類似性などを考えると、本来は同種族同士であった人々による戦いを描いたものである可能性がある。この場面を理解するための一つの手掛かりとして上部の船の右端に描かれた人物に注目すべきである。彼だけが他の人物とは異なりこの場面の中で単独で佇み、手には先端が巻いた縄のようなものを持っている。もし彼が持つものが彼の背後に描かれた船を岸に導くための綱であったとするなら、我々は第5王朝3代目の王ネフェルイルカラーの時代の官吏ラアウエルの墓から出土した碑文の冒頭を思い出す。そこには以下のような内容が書き記されていたのである。

「上下エジプトの王ネフェルイルカラーは、神の御船の船首の引き綱を掴む日に下エジプト王として現れた。」²²

ここではネフェルイルカラー王が綱でもって船を引く様子が描写されている。それも下エジプトの王権と関連付けられる行為として紹介されているのである。ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルのこの場面は、このラアウエルの碑文と同様の意味を持っている可能性がある。つまり下エジプト王が船を導いているという意味になる。この点を考慮するならば、先述した卵形の物体がデルタ西部のレットボリスを表すヒエログリフであるという指摘は重要性を増す。デルタ地域のレットボリスやベフデトがホルス神を奉じていた点も重要である。上段の船は勝者である下エジプトの船であり、下段は敗者で

²² 細守泰子「古王国における奇跡信仰—ラアウエル碑文再考—」、屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社、2003年、80頁。

あり下エジプト王に敗れた上エジプトの船を描いているのかもしれない。しかしながら、この箇所は幾分不明瞭であり、先端が渦巻き状になったものは綱ではなく弓である可能性がある。ヒエログリフで弓はヌビアに関する言葉に用いられている²³。古代エジプトでは伝統的に弓は「九弓の敵」という言葉で表されるようにエジプトの敵国を意味した。ジェベル・シェイク・スレイマンの岩壁画に類似例が見られるこの種の弓はヌビア人を指すと考えられている。ヌビアは上エジプトに隣接する現在のスーダン北部に相当する。しばしばここに描かれた戦闘において、優勢に見えるスキンヘッドを特徴とした人々は、船の形と相俟ってメソポタミアの人々であると考えられてきた。しかしながら、ペニスケースはアフリカ的な特徴のように思われるし、もしこの先端が渦巻き状になったものが弓を表したものであったとするなら、弓はヌビア人を指すことから、南方に住む人々を表現したものと考える方が妥当であろう。

このナイフハンドルは、エジプト対下ヌビアの戦いにおいて、下ヌビア側が勝利したことを記念して作られたのかもしれない。あるいは弓矢は古来、下エジプトのデルタ地帯の都市サイズで信仰されていた女神ネイトの象徴でもあった。ネイト神は、第1王朝期の有力な女性王族のネイトホテプやメルネイトの名前に採用され、通常下エジプトの象徴である赤冠を被り表される。この点を考慮するならば、弓と下エジプトとの関連性もまた提案されるべきであろう。さらに実際にアフリカの要素であると見なされることの多いペニスケースも下エジプトのテル・エル＝ファルーカ出土の彫像に用いられている点も下エジプト説の有力な根拠となるであろう。もしこれらの点を重視するならば、ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル上に描かれたこの戦闘場面は、上エジプト対下エジプトの戦いを表したものであると考えることが出来る。

さらなるもう一つの可能性として彼らの髪型に注目したい。長髪あるいは房を持つ髪型は西方地域に住んでいたリビア人の特徴、そして短髪あるいはスキンヘッドはエジプト人を表現したものと考えるならば、ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルは、従来考えられてきたエジプト対シュメールなどという大規模なものではなく、エジプト人对西方のリビア人との戦いを表したのだと提案出来よう²⁴。当時、デルタ地域西方にリビア人たちが暮らしていたのかもしれない。

以上のことから考えると、このナイフハンドルの左右の面が異なる民族、あるいは左右が全く関連性の無い主題を表している可能性が存在する。ストッパーのある表面側は、メソポタミアに特徴的な服装をした人物の例のように、図像として文化的先進地域であったメソポタミア的要素を取り入れ、その裏側はエジプト内部における同族同士の争い、あるいはエジプトとその近隣諸部族との戦いを表現していると考えるのである。つまりエジプト対下ヌビアの戦い、あるいは上エジプト対下エジプトの戦い、あるいはエジプ

23 S. A. Gardiner, *Egyptian Grammar 3rd ed* (Oxford, 1957), p.512-Aa32.

24 Mark, *op.cit.*, pp.71-72.

ト人対リビア人の戦いを表していると解釈出来る可能性がある。さらに勘繰ると、当時最大の勢力を誇っていた上エジプトと後の時代のように、下エジプトのデルタ地帯を支配していた西方起源のリビア人との戦いであったのかもしれない。非常に複雑で見方によって、幾通りにも解釈が可能であるため、現段階において明確な結論を出すことは困難を極める。しかしながら、表面と裏面に描かれた場面が異なるテーマを表しており、その上裏面の白兵戦による戦闘場面と船同士による海戦とが異なる二つのテーマを表していたと考えるならば、最終的に以下のような仮説が成り立つ。

つまり、ジェベル・エル=アラクのナイフハンドルとは、表面にシュメール的モチーフを用いたものである。そして裏面上部は最も顕著な特徴である髪型を重視してエジプト人対リビア人による陸上戦、あるいは弓とペニスケースを重視して上エジプト人対下エジプト人の戦い、そして裏面下部は船の特徴を重視して上エジプト人対シュメール人、あるいは上エジプト人対下エジプト人による水上戦という二種類の戦闘場面を表した可能性がある。当時ナイル河谷は東西、あるいは東西南北からの外部圧力を受けていたのかもしれない。統一王朝出現直前の時期のナイル河谷は、異なる文化背景を持つ幾つかの民族が覇権を争っていたが、その中心には、民族の出自に関わらず上エジプト地域（ヒエラコンポリスやナカダを代表とした小国家・西方砂漠の人々）対下エジプト地域（デルタの住民・デルタ西方のリビア人・東方のメソポタミアからの人々）という構図が常にあったのである。

2. メトロポリタン美術館ナイフハンドル上の玉座の王

白冠を被る人物

現在メトロポリタン美術館に所蔵されているこのナイフハンドルは、その表面に所狭しと彫りこまれた非常に詳細で興味深いレリーフにより、古代エジプト王権の芽生えを暗示するものとして知られている（図8参照）。

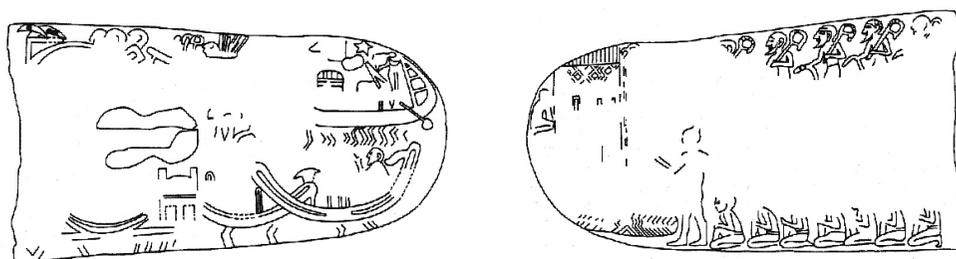


図8 メトロポリタン美術館ナイフハンドル

初期王朝時代以前のものであると考えられているこのナイフハンドルの表面には、右前方へ進む船団おもてめんが描かれている。確認可能なものは四艘である。上段に描かれた船と下段に

描かれた船とは船尾の形から種類が異なることが見て取れる。上段の船はジェベル・エル＝アラクのナイフハンドル上に描かれた船の船尾と良く似た形態であることがわかる。先程検討した際には、ジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルに描かれている船の船尾について横梁を表現したものである可能性を提案したが、もし船の材質が古代エジプトにおいて最も良く知られていた原材料のパピルスであるとするならば、パピルスで船の先端で束ねた箇所を縄で結わえた様子を表現したのかもしれない。一方下段に描かれた三艘の船もまたジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルやヒエラコンポリスの第 100 号墓に登場するエジプトのブーメラン型の船と同型のものである。描かれた船が一段落ち込んだ船の内部構造を表しているように見えることからこの説は補足される。これを単に真横から水平に見た場合の船の側面に描かれたデザインを表したものであるとみなすことも出来るが、古代エジプト人たちが絵画表現方法として「側面開き平面図的見取図」²⁵を用いていたことから考えると、船の内部構造を表現したものである可能性は高い。互いに直交する三面（水平に側面で描かれた船、真上から見る船底、立面で奥行きを示す人物像）を一つの面として捉える絵画手法は、見事に三次元ユークリッド空間を表したものと言えよう。

さて、この遺物の表面最大の焦点は上段に描かれた船上の後方部にある。そこには椅子に座った一人の人物が描かれている。これまでに本論中で紹介してきた人物たちとは異なる外見であることがわかる。縦長の円錐形の外観を持つ白冠を被るその人物は明らかに古代エジプト王を表している。ピラミッド・テキスト第 469 誦に描かれた船上の王を髣髴とさせるものがある²⁶。ヘジェット冠と呼ばれているこの白い冠は、本来上エジプト王が被る王冠として知られてきたものである。古代エジプトには多種多様な王冠、あるいは王の被り物が存在するが、この白冠は後の時代に下エジプトの象徴となる赤冠と共に最も古いレガリア（王権の象徴）の一つであった。王冠や被り物の使用は、その社会内における圧倒的な格差の現れを意味している。時代と地域を問わず、世界各地において冠を代表とする被り物と王権の関係が密接であったことが知られている。例えば『旧約聖書』の列王記には、ソロモン王が王冠を受け即位したことが記されている。またフランク王国の王となったシャルルマーニュがローマ教皇から王冠を受け取る場面は、ラファエロの絵で我々に良く知られている。類似例として頭部に聖油を掛ける王位に関係する儀礼もまた良く知られているものである。イングランドをデーン人から守ったアルフレッド大王は、頭に聖油を受けて即位した。アジアにおいてもチベットの吐蕃の王とその影響下にあった南詔国の王は、王権の象徴の一つとしてツェンポ冠と呼ばれる金冠を被っていた²⁷。

²⁵ 横地清『絵画・彫刻の発展史を数学で嗜もう (1) 数学の文化史』東海大学出版会、2006 年、19、94-98 頁。

²⁶ R. O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts* (Oxford, 1969), p.158-Utterance 469.

²⁷ 大原良通『王権の確立と授受—唐・古代チベット帝国(吐蕃)・南詔国を中心として—』汲古書院、2003 年、227-229 頁。

頭部に何かを被るという行為により、明らかに人は人ならざるものへと「変身」を遂げる。そしてその瞬間から彼あるいは彼女は、神と人間とを繋ぐ役目を負うのである。ある時、その人物は秋田のナマハゲや八重山諸島に見られるアカマタ・クロマタのように仮面を被りこの世と隔絶した常人となる。ある時はレ・トロア・フレール洞穴の壁面にある鹿の角と馬の尾を持ちフクロウの顔をした有角の神となり²⁸、またある時は動物の頭部を持つ古代エジプトの神々を演じたのであろう。口寄せにより祖先の霊を呼び出す沖縄の霊媒師であるユタや南米に見られる病気を治療する特殊能力を持つ呪医 Medicine Man のようなシャーマンとしての側面を得た人物と同じように、被り物により変身する人物の登場は、その時点でそれまで人が決して触れることが出来なかった圧倒的存在である「自然が持つ力」＝「人知を超えた能力」が、ある特定の人間に属するものであるという主張の始まりであった。自然を凌駕する能力の保持は、明らかに他の人々と一線を画する意味を持つのである。典型的な例としてレインマンのような天候を操る能力を持つとされた人物の存在が知られている。暑く乾燥した厳しい気候の下、卓越した力により人々と大地に雨をもたらし、農耕地を潤すことの出来る人物の存在は、その社会の存亡を左右することを意味した。そのような中、一定の文化レベルに達した社会は、王冠を被るに足る能力を持つ人物として一人の「王」を選び出したのである。

古代エジプトの白冠もまた本来は特殊能力を持つ人物に与えられたものであったのであろう。白冠自身の持つ意味は、上エジプト王の象徴でありレガリアであったことくらいでほとんど知られておらず、その起源ですら明確ではない。赤冠と同様に古代エジプト最古の王冠であることが知られている程度である。もし我々に地上に存在するあらゆる生物・無生物全てには魂が宿っているというアニミズム的な発想が許されるならば、上エジプト王の象徴とされる古代エジプト王の白冠は、強力な力を持つサイや牡牛の角、あるいは象の牙を表しているのかもしれない。なぜなら後の時代に出現する古代エジプトの多種多様な王冠には動物の角や鳥の羽など動物の体の一部から採られた要素が確実に見られるからである。もしさらなる飛躍が許されるならば、キリンの頭頂部に突き出した部分、つまり頭骨（図9参照）²⁹がその原型であったと提案しておきたい。地上最大の哺乳類であったキリンは、古代エジプト王の表象であったのかもしれない。ナイル世界を含む北アフリカにおいて最も優雅で美しい容姿と王権に関係する文様と考えられることもあるダイヤモンド紋様（連続菱形紋）³⁰と類似する網目文様を持ち、さらに巨大な体躯を持つキリンこそ古代エジプト王権の象徴に相応しい。

²⁸ 横山祐之『芸術の起源を探る』朝日新聞社、1992年、293-294頁。

²⁹ F. Jesse, The Wadi Howar, in D. A. Welsby and J. R. Anderson (eds), *Sudan: Ancient Treasures* (London, 2004), p.57-fig.36.

³⁰ 中野智章「古代エジプト王権研究における新視点―王像のベルトに記された王の独占文様」屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』同成社、2003年、61-75頁。



図9 キリンの頭骨の頭頂部

王笏と聖船

船上の人物はまた王冠と同様にレガリアとして扱われる王笏（殻笏）を持っている。まるで日本の神社において神主がお祓いに使用する際に用いる木笏のようである。ジェベレイン出土の彩色麻布片に描かれた船上で玉座に座る王が同様の王笏を持つ例が知られている³¹。古代エジプトではこの種の笏は、王位更新祭として知られるセド祭において王の衣装の一つとして使用されたり、冥界の王であるオシリス神の持ち物として描かれることが多い。古代エジプト王は死後、オシリス神となり、あの世を支配すると考えられていた。王位更新や冥界との関連性は、王の再生復活と密接に繋がる事象と言えるであろう。また船上にはナカダⅡ期の彩紋土器やヒエラコンポリス第100号墓の彩色壁画に見られるのと同様に中央の場所に船室が描かれている。しかし船室であろうと考えられているこの物体は、果たして本当に船室を表しているのでしょうか。古代エジプトの場合、重要人物・重要な事物を他と比較する際、大きく描くという法則が存在するため、単純には判断を下すわけにはいかないが、人が中に入り込み過ぎすには小さ過ぎるよう思える。もしかしたら、死者のための棺を描いたものかもしれない。ノルウェーのゴクスタッド Gokstad で出土した船葬墓に用いられた船の中央には家屋が設置され、その中から男性の人骨が出土している³²。このような埋葬における船上の家=棺の例も知られているのである。古代エジプトやシリアのパルミラでは、墓のことを「死者のための永遠の家」と呼んでいる³³。日本の古墳時代に見られる切妻状の天井部を持つ

³¹ 拙著、『古代エジプト文化の形成と拡散——ナイル世界と東地中海世界——』ミネルヴァ書房、2003、38頁-図2-2。

³² 小江慶雄「スカンジナビアにおける発掘船について」大林太良編『日本古代文化の探求・船』社会思想社、1975年、230頁。

³³ 拙著、前掲書、167-169頁。

横穴式石室や家形石棺もまた同様の発想であろう。メトロポリタン美術館ナイフハンドルに描かれたこの場面は、あの世へと船を漕ぎ向かう王、あるいは王の前面に棺のような物が置かれていることから、先王を弔いあの世へ送るために船を漕ぐ次王を表現したものかもしれない。

先王の葬儀を執り行った者が次王としての権利を得るという考え方は、他の世界でも知られている。例えばアレクサンドロス大王の遺体を巡って臣下たちが争った例が有名である。我が国においても船上に棺を置く例は、福岡県五郎山古墳や熊本県弁慶ガ穴古墳の壁画に見られる³⁴。M. エリアーデ Eliade は、インドネシアやメラネシアにおいて行なわれていた死者を船に乗せたり、海に投げ込み捨てる習俗を紹介しつつ、現実的・象徴的を問わず、儀礼用の舟を用いる三種類の呪術宗教的習俗を以下のように挙げている³⁵。

- (1) 悪魔や病気を捨てるための舟
- (2) シャーマンが患者の魂を捜すために「空中を旅する」舟
- (3) 死者の魂を他界へ運ぶ「靈魂の舟」

メトロポリタン美術館ナイフハンドルに描かれた船とエリアーデの挙げた(3)の死者の魂を他界へ運ぶ「靈魂の舟」の観念には通ずるものがあるのかもしれない。古代エジプト最古の神話であるオシリス神話においても弟セトの姦計にはまったオシリスは、殺害され棺と共にナイル川へと投げ込まれる。セト神側に立てば、この点はまたエリアーデの挙げた(1)の考えと一致するものでもある。水と船は時代と地域を問わず、いつの世もあの世と強く結びつくものなのである。

王の顔の正面前方には花びらをあしらったロゼット紋様が描かれている。ロゼット紋様は、サソリ王のメイス・ヘッド（棍棒頭）やクストゥル・インセンス・バーナー等にも見られるように、古代エジプト王の王権の象徴の一つと考えられるが³⁶、この人物の後頭部に三日月の紋様が描かれていることから、ロゼット紋様ではなく星を表現したものかもしれない。以前ヒエラコンポリス第100号墓の彩色壁画で考察したように³⁷、太陽神信仰が未だ王権と強く結びついていなかった先王朝時代のエジプトの状況を考慮するならば、夜の闇の中を空に煌く星に導かれながらあの世へと聖なる船を漕ぐ王とその王に仕える人々の船をこの場面は表しているのかもしれない。先述したピラミッド・テキスト第469誦のみならず、神である王が船に乗るという伝説は、船を神宝として祀る

³⁴ 辰巳和弘『新古代学の視点―「かたち」から考える日本の「こころ」』小学館、2006年、125-126頁。

³⁵ ミルチア・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム』下、筑摩書房、2004年、107-108頁。

³⁶ 拙著、前掲書、72頁。

³⁷ 拙稿、前掲論文、31頁。

我が国の千葉県安房郡の手斧鑿神社においても知られている³⁸。ナイフハンドル上に描かれた船の下にはジグザグ状の線が複数下方へと伸びている。恐らく水の流れを表現したものであろう。そして破損が激しいが、船の船首の前方にはパピルスが描かれている。サソリ王のメイス・ヘッドに描かれたパピルスと形態が類似するものである³⁹。パピルスはナイル川に生息する植物であるため、ここは「ナイル川を航行する船」の様子を補足しているのかもしれない。

表面下部には三艘の船が描かれている。ナカダⅡ期の彩紋土器やジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルに見られるものと同じブーメラン型をしている。右側の船は船底以外の部分は破損しており全体像が掴めないが、船の下に水平に線が引かれている点と幾つか斜めの線が下に伸びている点からうじて確認出来る。真ん中の船は、船上に縦長の物体と船首か船尾の部分に動物の首のようなものを置いているようであるが明瞭ではない。この二つの船の間に下エジプトの聖堂を表したと見なされているペル・ヌウ⁴⁰と呼ばれるものが描かれている。デルタの中心地プト起源と考えられているこの建物の図は、正面が二つの長方形の枠で描かれ、そして上部の左右が垂直に立ち上がり、その間の部分が半円形状に膨らんだ屋根を持っていることを特徴としている。類似のモチーフは、ハンター・パレットの表面上部とサソリ王のメイス・ヘッドに表された王の足元に既に描かれている⁴¹。ペル・ヌウ＝テント型聖堂として知られるこの種の建物は、第1王朝のデン王の象牙製ダブレットをはじめとして王権に関する幾つかの資料に描かれ⁴²、後の第3王朝のネチェリケト王の階段ピラミッド・コンプレックスのセド祭の祠堂へとその伝統は引き継がれたと考えられている。しかしながら、聖堂と見なされているこのモチーフに形が類似するものがもう一種類知られている。それは棺である。例えば第三中間期に年代付けられているモンチュ神の神官であったホルの木棺⁴³やアスペルタ王の石棺などが類似例として知られている⁴⁴。ウシャブティを入れる箱にもペル・ヌウの形が採用されることが多かった⁴⁵。これらは先述した船上に棺を置く習慣の類例として捉えることも可能である。つまり葬儀に関するコンテキストにおいて、棺とは家と同義であるのである。

三艘の船の中では左側の船が最も状態が良好である。その船上では一人の男が座して

³⁸ 清水潤三「日本古代の船」大林太良編『日本古代文化の探求・船』社会思想社、1975年、20頁。

³⁹ B. Williams and T. J. Logan, The Metropolitan Museum Knife Handle, *Journal of Near Eastern Studies* 46 (1987), p.249.

⁴⁰ M. ヴェルナー著、津山拓也訳『ピラミッド大全』法政大学出版社、2003年、39頁-18、138頁-70。

⁴¹ Williams and Logan, *op.cit.*, p.249.

⁴² B. Kemp, *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization 2nd ed* (Oxford, 2006), p.145-fig.51-1.

⁴³ G. Robins, *The Art of Ancient Egypt* (London, 1997), p.222-fig.265-267.

⁴⁴ C. Bonnet and D. Valbelle, *The Nubian Pharaohs: Black Kings on the Nile* (Cairo, 2006), pp.162-163.

⁴⁵ R. H. Wilkinson, *Reading Egyptian Art: A Hieroglyphic Guide to Ancient Egyptian Painting and Sculpture* (London, 1992), pp.142-143.

手を前に掲げている。大きな耳を持ちスキンヘッドに髭を蓄え、手には笏を持っているようにも見える。トゥトアムン王の黄金のマスク等に見られるように古代エジプト王の象徴でもあった顎髭は、先王朝時代から古代エジプトにおいて権力の象徴であった。顎髭を強調した先王朝時代の象牙製の小像が数多く出土している。船の下には先程の王の乗る船と同じようにジグザグ模様で波が表現されているのが見て取れる。

その他にも様々なモチーフが描かれている。表面の真ん中上部に描かれた人頭を持ち背中から植物のような何かが生えているものは、ナルメル王の奉献用パレット裏面に描かれている特定不能の物体と同じものであろう。ナルメル王の奉納用パレット上では背中に六本のパピルスを生やしている様子が見て取れる。この類似性から考えると、メトロポリタン美術館ナイフハンドルは、最初に上下エジプト王国統一を果たしたと想定されているナルメル王と同時代の遺物である可能性が高いが、ヒエラコンポリスから出土した後の第2王朝最後の王カーセテム（カーセテムウイ）の供養碑の断片にも類似したものが確認されている⁴⁶。

王宮へ帰還する王

裏面に描かれた場面の上部には列を成す髭を顎に蓄えた男たちが確認出来る限りで五人見られるが、彼らは一様に両手に何かを持ち肩に掛けながら行進している。右手には縄のようなもの、そして左手には古代エジプトでヘカトと呼ばれる羊飼いが使用する杖のようなもの、あるいは船用のパドルかオールと思われるものを各々一つずつ持っている。特に左手に持っているものがヘカトである場合は、後に王権に関わる表象となるため注目すべきであろう。なぜならば、ヘカトは冥界の王であるオシリス神が持つ物とされているからである。もし彼らが持っている物がヘカトであるとするなら、王宮あるいは神殿に向かう首長クラスの人々を表していると考えられる。

下方には七人の人物が右向きに片膝を着き左手を少し前方へ出している様が見て取れる。彼らの前には一人の人物が佇んでいる。彼はまるで後の王朝時代にエジプト王が神々へと奉納物や聖水を捧げる際のように両手を自らの胸の前に掲げている。このようなポーズは神々への敬意を表現していると考えられている。またこの人物は頭部に白冠を被っているように見える。これらのことから考えるとこの人物は古代エジプト王を表したものと見えよう。そしてこのナイフハンドルの裏面に描かれた王を含む全ての人物たちは、右端に描かれた一つの建物に向かっている。建物の上部には後の時代のエジプト神殿建築に見られるような蛇腹紋が使用されている。この建物が先述したテント型聖堂であるペル・ヌウと同一のものかどうかは明確ではないが、白冠を戴いた王が家臣を引き

⁴⁶ T. A. H. Wilkinson, *Early Dynastic Egypt* (London, 1999), p.178-fig.5.3.4; W. B. Emery, *Archaic Egypt: Culture and Civilization in Egypt Five Thousand Years Ago* (London, 1961), p.100-fig.64.

連れてこの建物に詣でている様子から考えると、神殿のプロトタイプ（原型）、あるいは建物に入場しようとしている場面であるならば王宮の一形態であるのかもしれない。この建物の表面上部にダイヤモンド紋様が施されていることにも注目すべきである。ダイヤモンド紋様は、古代エジプト王権の象徴の一つであったという指摘がなされている⁴⁷。古代エジプト王の彫像には、しばしばこのようなダイヤモンド紋様のベルトが腰に巻かれているものが知られているのである。このメトロポリタン美術館ナイフハンドルの両面に描かれたのは、戦争・遠征を終え王宮に帰還する王と彼の臣下たちなのかもしれない。建物の裏には膝を着く人物が描かれており、主人を丁重に出迎えている。この主人が現世の王であるのか、あるいは死した王を表したものであるのかは明らかではないが、両面共に特定の儀式の流れの中の一場面を切り取ったかのような印象を受ける。また建物の下にはジグザグ文様のある水面が描かれていることから考えると、ナイル川の近く、あるいはナイル川の西岸に建てられたことを表しているのであろう。もし後の時代のように、この場が王のための葬祭殿が造られたナイル川西岸だと仮定すれば、葬送に関する場面を描いた可能性が高い。つまり、メトロポリタン美術館ナイフハンドル上には、表面で死した王とそれを弔う次王を、そして裏面は来世での永遠の家である王宮へと家臣を伴い向かう亡き王を表現していると考えられるのである。

おわりに

以上、これまでジェベル・エル＝アラクのナイフハンドルとメトロポリタン美術館ナイフハンドルという二つのナイフハンドルを採り上げ、その裏表両面に描かれた図柄の解釈を行ない、問題点を取り上げ、幾つかの新たな提案を行って来たが、最後にナイフハンドルというものが、本来はナイフの柄、つまり武器としての機能を持つものの一部であることを我々は再認識しておかねばならないであろう。ナイフは、日々欠かせない生活道具の一つである以上に武器の要素を強く持ち、ナイル川とその周辺地域に生存する動植物のみならず敵を対象に使用されるものであった。またナイフは王権と結び付けられる際には、邪悪なものを凌駕する存在となった。ナイフの基本的役割は、負の要素を神聖なる王から取り去り、祓い清める道具なのである。二つのナイフハンドルの持つ意味は、過去のナイル世界における出来事や儀礼の記録保持だけではなく、古代エジプト王権そのものを反映している存在として重要なのである。（歴史学科准教授）

⁴⁷ 中野、前掲論文、61-75頁。